



泉新だより

令和 5年 9月 1日
練馬区立泉新小学校
校長 宮崎 晴美

教育目標 : 思いやりをもち助け合う子 よく考え進んで学ぶ子 健康でやりぬく子

エジプトで推進する日本式教育 TOKKATSU

校長 宮崎 晴美

この夏、校長仲間がエジプトに出発しました。エジプシャン・ジャパニーズ・スクールのスーパーバイザーとして日本型教育を指導するためです。

2018年10月3日エジプトで、日本式の教育内容を取り入れた公立学校35校が開校しました。エジプトと日本の間で結んだ「エジプト・日本教育パートナーシップ(EJEP)」の下に創られた「エジプシャン・ジャパニーズ・スクール(EJS)」です。教師たちが組織で指導に当たる日本式教育を取り入れるため職員室が設置され、うがいや手洗い、歯磨きも可能とする可動式の蛇口に石けんを括り付けた流しも整備されました。また、教室には、学級会など対話的な学びを効果的に展開するため、学習隊形を多様にアレンジできる1人1つの机やいすが用意され、毎日清掃ができるように清掃用具入れも備えられました。日本では、昔からなじみのスタイルですが、海外では全く新しい取り組みです。

基礎教育では、日本の特徴的な教育カリキュラムの1つである『特別活動』を手本とした『TOKKATSU』を週1時間実施し、子供たちの規律や道徳心とともに協調性を養い、知・徳・体のバランスのとれた人格形成を図ることをねらいとしています。

エジプトの日本式教育開始から5年を経て、現在エジプシャン・ジャパニーズ・スクール(EJS)は51校に増え日本から100人を越える校長経験者が派遣されています。

エジプトからも今年5月中旬、約20人の指導主事が視察のために来日し、都内の小学校で学級会運営を見学したり、大学で特別活動に関する講義を見学したりと熱心に特別活動充実の手だてを探る様子が新聞で報じられていました。

ではなぜ、日本式の教育が海外で評価されるのでしょうか。

東日本大震災の際、避難所となった各学校の体育館では、中学生や高校生が大きな力となったと聞きました。避難所の清掃、炊き出しの手伝い、物資の運搬など、新たなことではなく普段から行ってきたことを生かし、自分たちにできることを見つけて積極的に取り組んだそうです。大人も同様に、入浴の順番や食事の分配、洗濯物の洗い場や干し場の確保等さまざまな問題を、行政指導ではなく避難者同士の話し合いによって解決したことに海外の人々は驚いたといえます。小学校時代から繰り返し取り組んできた、学級会や児童会・生徒会などの話し合いの体験が活かされたのでしょうか。

サッカーの世界大会でも、日本人サポーターのごみ拾いやロッカールームの清掃が世界から絶賛されたことを思い出します。このような行為の原点も『特別活動』にあると感じます。自分たちの学校は自分たちできれいにするという意識は、日常的な清掃活動によって染み付いているのです。「日本人は幼い頃から、掃除の習慣を教え込まれる。サッカーの試合後の掃除は、学校で習った基本的な習慣の延長だ。」と海外のメディアは伝えていました。

学校教育を通して社会性や生活習慣なども身に付けさせようと力を入れるエジプトの取り組みから、改めて日本の『特別活動』の意義を再確認することができました。

一方日本ではここ数年、コロナ禍と働き方改革で『特別活動』は縮小の一途をたどっています。また、グローバル人材育成が急務とされ、欧米の文化にばかりに注目しているように感じます。しかし、こんな時代だからこそ日本式の学校教育に誇りをもち、海外へも広く伝えていく必要があるのではないかと考えています。